GPT-6.1 Terra 徹底調査と知財業務への影響

「中位モデル」の底上げは知財実務をどう変えるか（2026年10月27日調査）

ボトムライン（結論）



【結論】Terraは、Astraの10分の1のコストで高度な視覚推論と画面操作を実現する「大量処理エンジン」である。

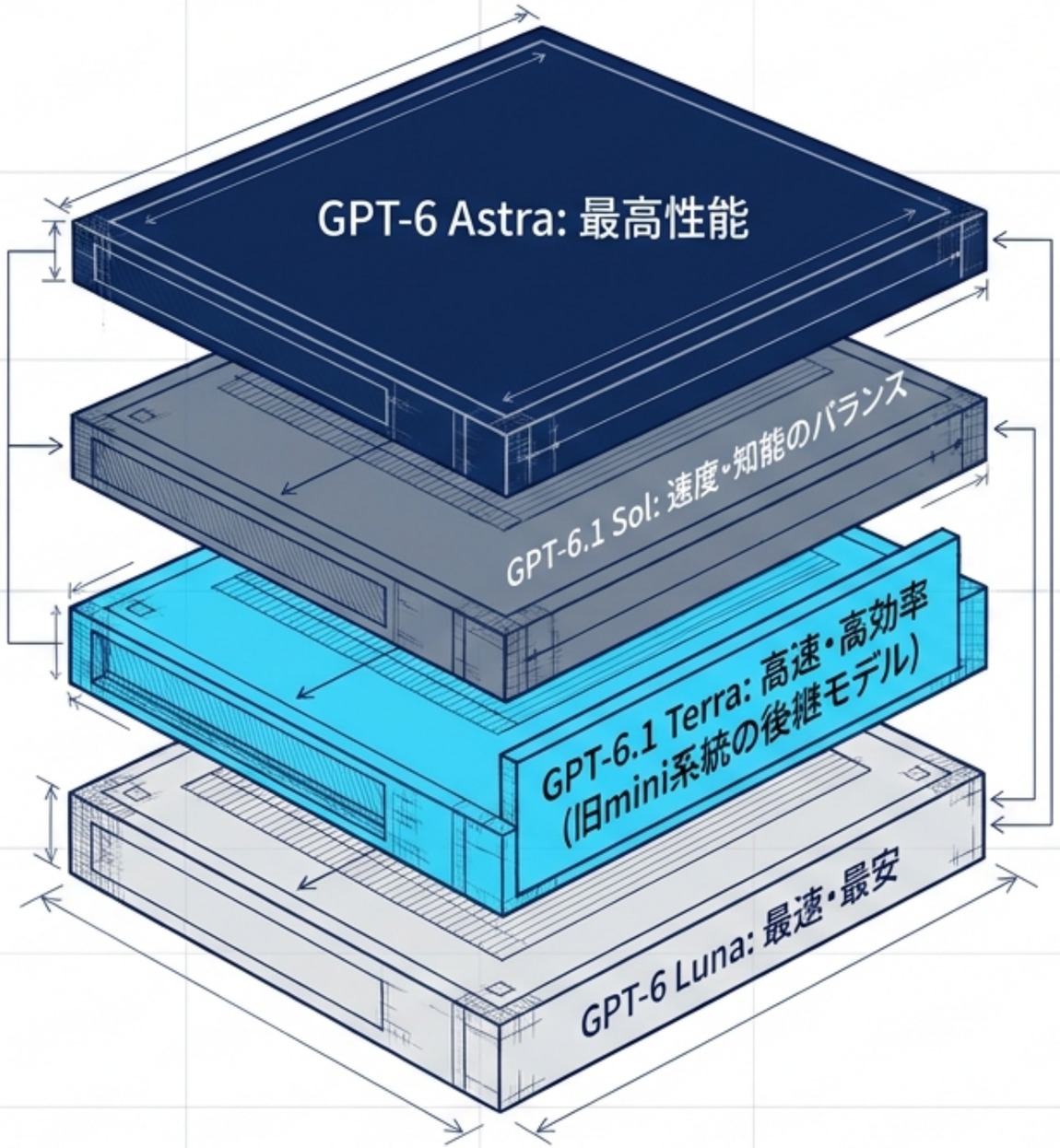


【影響】これにより、知財業務は「処理（AI）」と「判断（専門家・上位モデル）」に完全に分離される。



【行動】知財部門は、単一モデルの利用から脱却し、コスト・ガバナンス・ハルシネーションリスクを制御する「マルチモデル・ルーティング設計」へ移行しなければならない。

Gemini Notebook



Terraの主要スペック

コンテキスト長

105万トークン

(数百万文字規模の入力が可能)

API価格 (100万トークン)

入力 $1.00 / 出力 $5.00

(バッチ処理は半額)

知識カットオフ

2026年6月1日

主要な強み

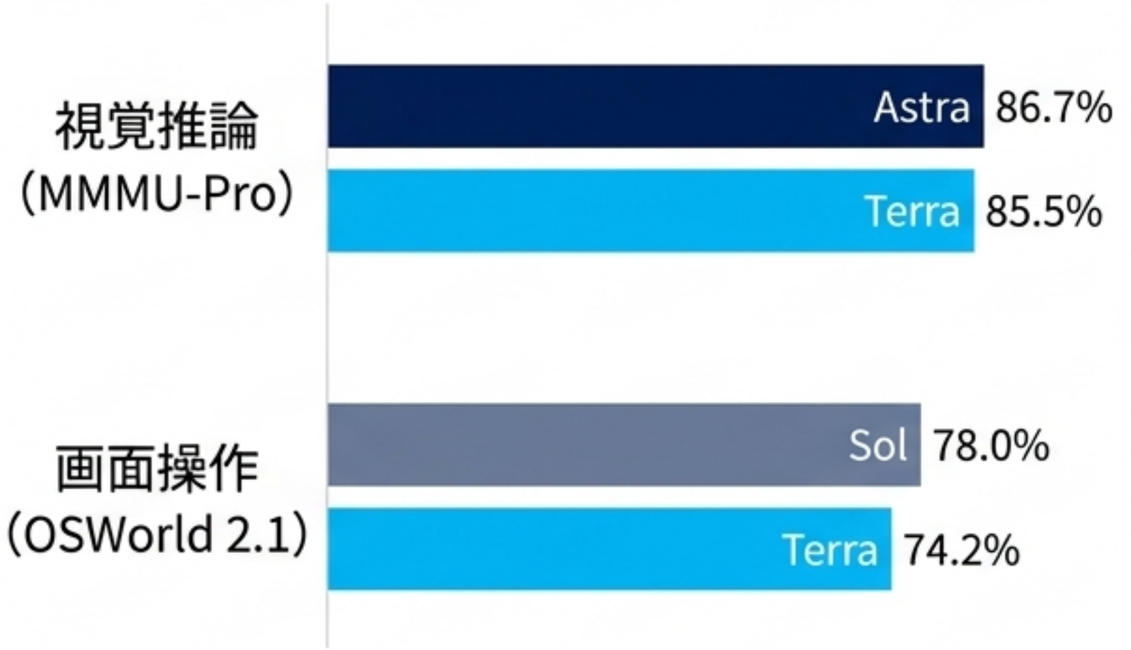
GPT-6 Luna:優先、高速
速空の可能

主要な強み

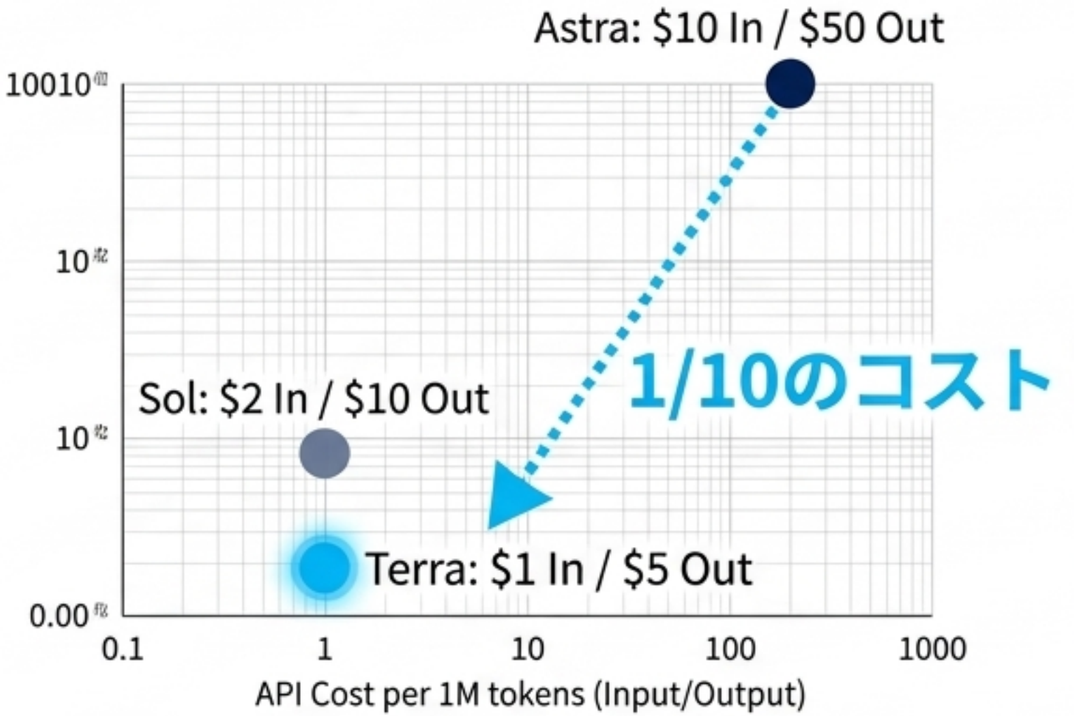
技術図面の解釈、自然な文章作成、画面操作の自動化

Gemini Notebook

視覚・操作性能の肉薄

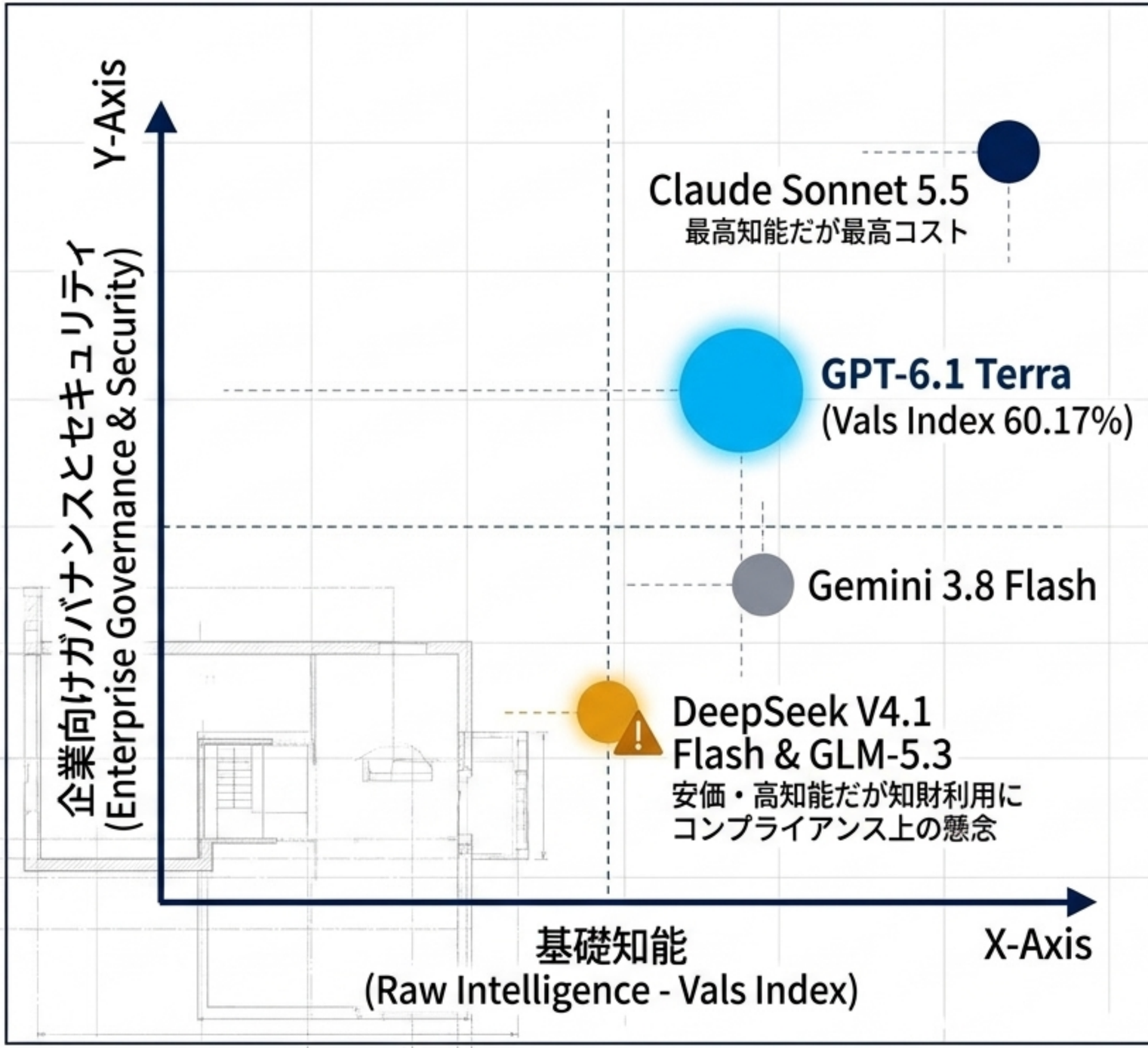


圧倒的なコスト破壊



高度な視覚処理（図面読解）とPC操作能力が、最上位モデルの「10分の1」のコストで利用可能になったことが最大の技術的ブレイクスルーである。

Gemini Notebook



Insight Panel

【知能指標での位置づけ】

- 純粋な知能では、中華系の安価なモデル(DeepSeek V4.1)と同水準。

【Terraの真の優位性】

- 機密性の高い知財業務において、 OpenAI/Azureの「ゼロデータ保持(ZDR)」等のエンタープライズ管理機能が使える点に実質的な価値がある。

Gemini Notebook





【Effort設定の落とし穴】

- Terraの推論設定を「Max（最大）」にすると、上位モデルであるSolの「Medium（標準）」よりも成績が低いにもかかわらず、**コストが約2倍になる**逆転現象が発生する。

運用ルール：
業務ごとに最適なEffort設定を標準化し、全社で固定すること。「とりあえずMax」は厳禁。

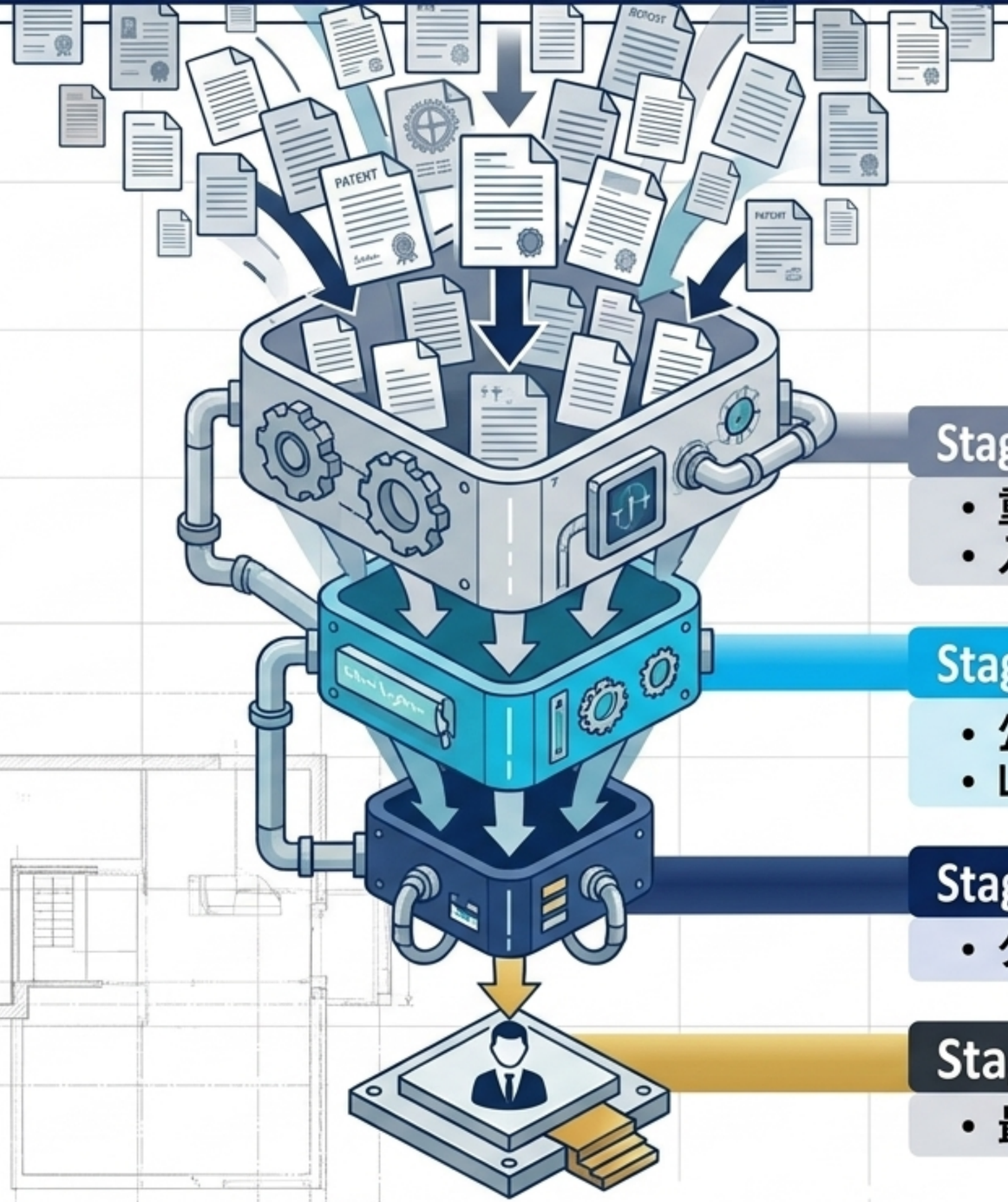
Gemini Notebook

知財タスク別 適用可能性マトリクス

知財タスク	Terra適合度	適用理由と役割分担
先行技術・特許検索	高 (High)	105万トークンで数百件の公報を一括スクリーニング可能。
図面の読み取り・対比	高 (High)	公報図面と製品写真の対応付けに最適。
J-PlatPat等の画面操作	高 (High)	画面操作(OSWorld)能力を生かした自動化。
明細書・クレーム起案	中 (Med)	実施例の下書きには向くが、クレーム設計は上位モデルが必要。
FTO・無効資料の結論	低 (Low)	法律調査ベンチマークで58位。法的判断には不適格。
拒絶理由通知への反論	低 (Low)	対比表作成までは有効だが、進歩性の論理構築は不可。

重要な結論：スクリーニングと一次処理には最強のツールだが、法的結論（FTOや進歩性）をTerraに委ねてはならない。

Gemini Notebook



【アーキテクチャのシフト】
「上位モデル＝判断、中位モデル＝処理」という役割分担が、6.1世代で完全に確立された。

Stage 1: GPT-6 Luna (The Filter)

- 重複除去、言語判定、粗い分類
- 入力 $0.10 / 100万トークン

Stage 2: GPT-6.1 Terra (The Processor)

- 公報の大量スクリーニング、図面の読み取り、対比表の初稿作成
- Low〜Medium設定 (パレート最適)

Stage 3: Sol / Astra / Claude 5.5 (The Logician)

- クレーム起案、進歩性の論理構築、FTOの結論案作成

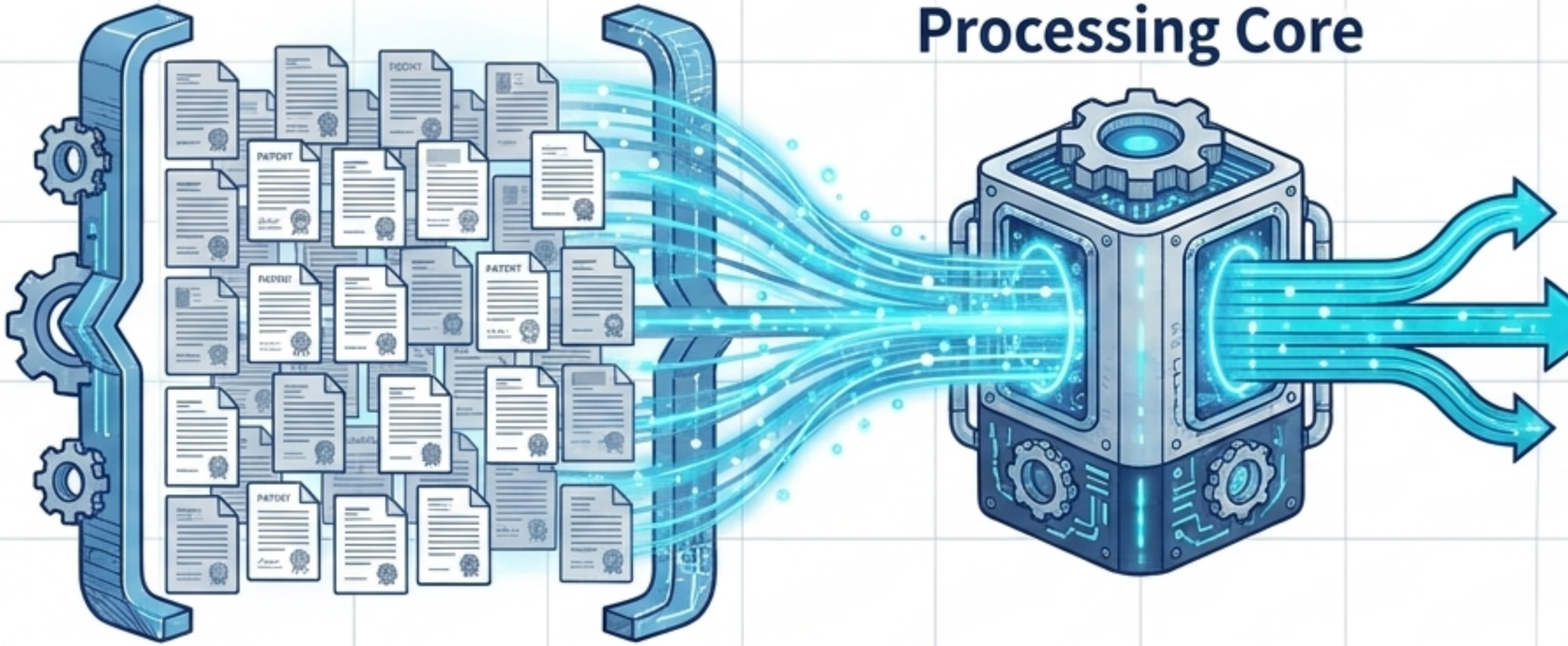
Stage 4: 弁理士・知財担当者 (The Judge)

- 最終判断、戦略的レビュー、署名

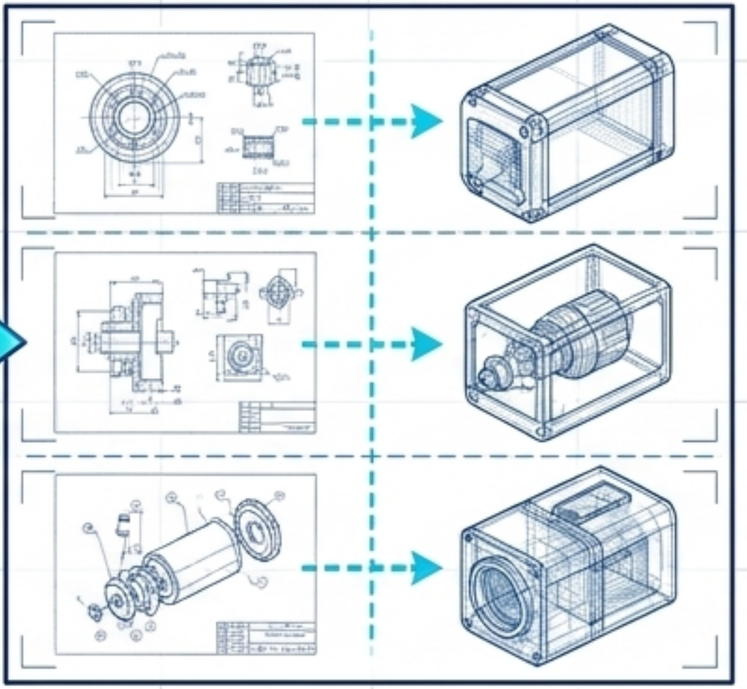
Gemini Notebook

1.05M Context Window

Terra Processing Core



対比表



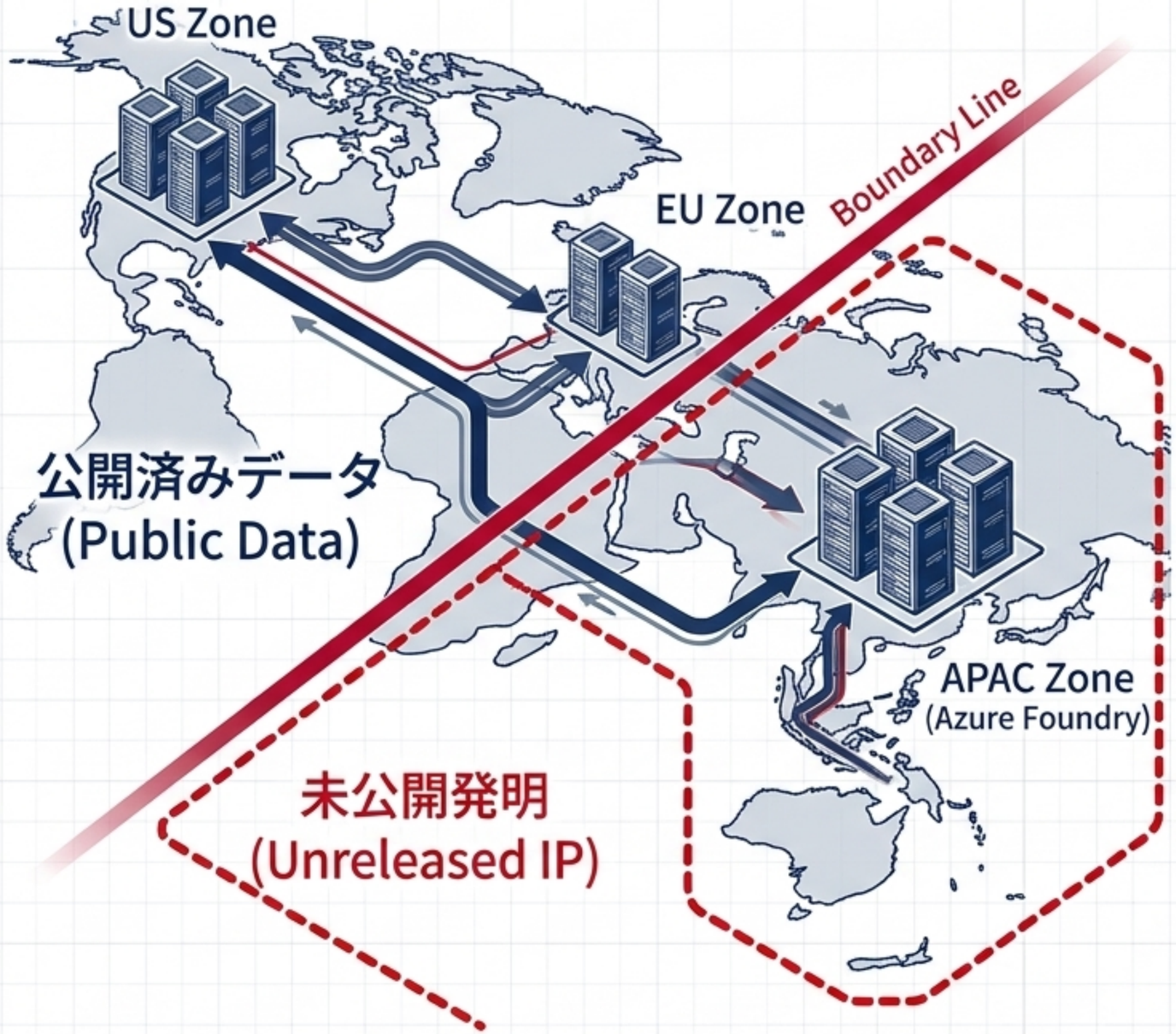
コスト試算：10,000件の公報一括処理

GPT-6 Astra	約 $1,050
GPT-6.1 Sol	約 $210
GPT-6.1 Terra (Standard)	約 $105
GPT-6.1 Terra (Batch API)	約 $53

※前提：1件あたり入力8,000 / 出力500トークン

数万件の公報ウォッチ(SDI)が、バッチ処理を利用すれば年間数百ドル規模に収まる。
調査担当者1人分の一次処理能力を極めて安価に代替可能。

Gemini Notebook



【データレジデンシーの実態】

- OpenAI API (Terra)：「US」と「EU」のみ対応。日本国内指定は不可。
- Azure：「APAC」で提供。ただし日本国内完結かは要確認。

【セキュリティ境界線と絶対ルール】

未公開発明を個人契約(Plus/Pro)に入力することは厳禁。

法人契約(Enterprise)または、承認済みの ZDR（ゼロデータ保持）/ MAM（修正版不正利用監視）契約が必須。

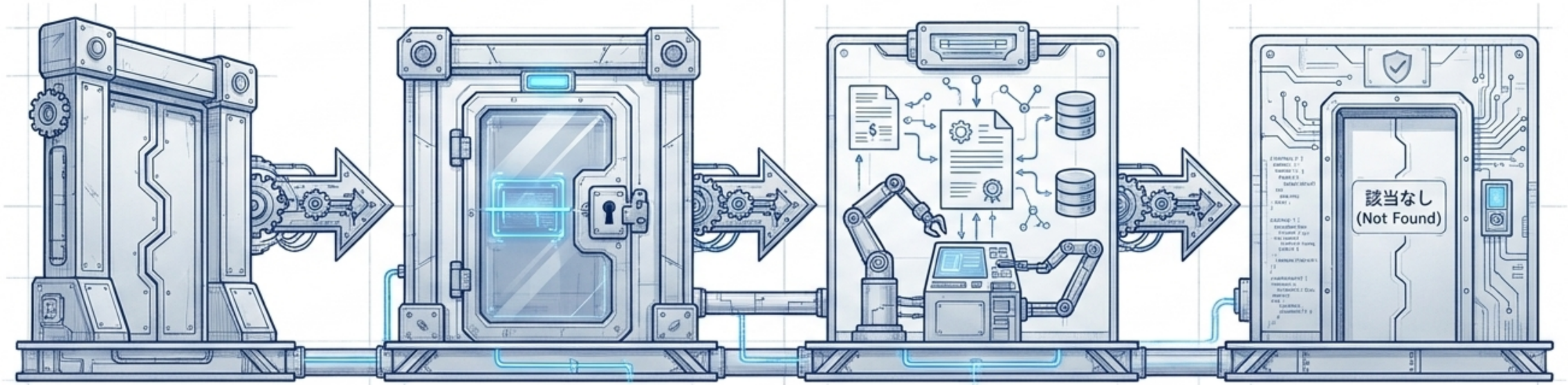
出願前の技術の国外処理（外為法等）への準拠を徹底すること。

Gemini Notebook

ハルシネーション隔離ワークフロー

【Terraのリスクプロファイル】

- 重大な事実誤り率: 4.3%
- 知らない問いに推測で答える率: 38%



Step 1: [制限]

Strict RAG（検索拡張生成）

文献番号・判例はDB検索結果からの引用を強制し、引用元IDを必須とする。

Step 2: [照合]

機械的検証（J-PlatPat等）

Terraの優れたUI自動操作能力を生かし、出力された特許番号を商用DBのAPIで自動照合する。

Step 3: [許可]

プロンプト設計

システムに「該当なし（Not Found）」と回答する明確な許可をプログラムレベルで与える。

Gemini Notebook

2026年8月25日

内閣府公表：「生成AIの適切な利活用等に向けた知的財産の保護及び透明性に関するプリンシプル・コード」

知財部門の新たな役割：監査権限の行使

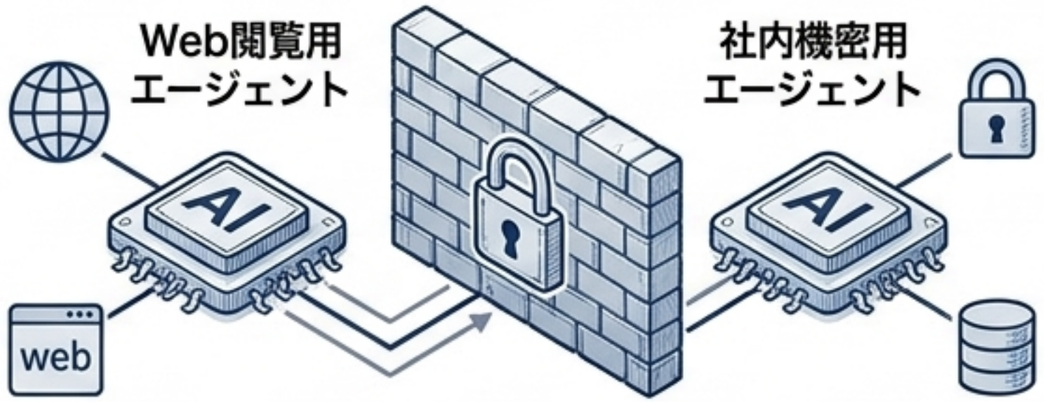
利用者である知財部門は、原則3に基づき、OpenAI等の事業者に対して学習データや知財保護措置を照会（監査）する立場となる。



物理的・論理的なエージェント分離

13.75% 外部指示による無許可行動率 (Terra)

Web閲覧用エージェントと、社内機密用エージェントは権限レベルで完全に分離しなければならない。



Gemini Notebook

実務上の6つの推奨事項（Action Plan）

1. 即時テスト (Test)

過去の無効調査案件を用い、2週間以内にTerra、Sol、Claude 5.5の再現率とコストを自社評価する。

2. ルーティング標準化 (Route)

「スクリーニングはTerra、起案はSol/Astra」のワークフローを明文化。Effort設定を固定する。

3. 契約・データ環境の確定 (Contract)

未公開発明を扱うためのZDR承認、処理地域（US/EU/APAC）を確定する。

4. 権限境界の設計 (Boundaries)

画面操作エージェントには「読み取り専用」権限のみを付与し、送信や削除をシステム制御で禁止する。

5. ハルシネーション対策 (Verify)

引用番号の自動照合と「該当なし」の許容を、全調査プロンプトに義務化する。

6. ポリシー監査 (Audit)

内閣府プリンシプル・コードの届出事業者一覧を確認し、自社のAI利用規程をアップデートする。

The IP Professional's Evolution: 知財部員のコアスキルは「文献を読む力」から、「AIシステムの監査役・設計者」へと完全に移行した。

Gemini Notebook